

2025年4月24日

教育開発支援機構 教育開発・学習支援センター

2024年度教員による授業相互参観実施状況報告書（教育開発・学習支援センターホームページ掲載内容）

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
法学部	【法律学科】昨年度および今年度着任した教員の担当科目 【政治学科】全科目 【国際政治学科】専任教員が担当する全科目	【法律学科】2科目 【政治学科】2科目 【国際政治学科】3科目	【法律学科】 下記のとおり、昨年度および今年度の新任教員担当授業につき、専門分野を同じくする専任教員による相互参観を行った上で、法律学科会議において報告がされ、教員間で共有が図られた。 ・「会社法」(伊藤雄司教授)→椋川泰史教授 ・「法学入門演習」(伊藤栄寿教授)→大澤彩教授 【政治学科】 複数の教員によって担当される「公共政策フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ」において授業内容の相互参観および意見交換が行われた。また、1年生向けの「政治学入門演習」(8クラス開講)においても、「政治学入門Ⅰ・Ⅱ」と緊密に連携し、その講義内容を相互に参照する機会を設けている。それに加えて、「政治学入門演習」の担当教員間で全クラスの学習成果を共有した。このことにより、特に少人数教育の教授法の理解が深まった。 【国際政治学科】 必修科目である「国際政治への案内」を10人の教員で担当した。各教員の専門分野を紹介し、国際政治を鳥瞰する講義を展開した。工夫が施されたレジュメとスライドを教員間で共有し、互いの講義内容を把握するよう努めた。「国際政治ワークショップ」に関しては、担当教員6人が相互に授業を参観し、授業の運営方法と学生の理解度について感想・意見を述べ合った。それにより、受講生のプレゼンテーションの質を向上させることができた。「戦後国際関係史」についても、担当教員4名が事前に入念に内容を話し合い、配布するレジュメを共有するなど緊密に連携し、全員の担当部分を横断した試験問題を出題した。	【法律学科】 ・意見交換を通じて、学生の授業への能動的な参加などを促す手法等について情報共有がなされ、非常に有意義であった。授業相互参観後の意見交換を継続することが重要だと考えられる。 ・相互授業参観につき、今年度はできれば春学期に実施することを方針とした。これは、より早い時期における実施により、本学の教室設備への対応を含めて、担当教員への配慮を検討する機会となることを意図したものであった。しかし春学期は教員が多忙であることも多く、早い時期の実施は必ずしも容易ではないことが意見交換によって明らかになった。 【政治学科】 とくに政治学入門演習について、相互参観をより実質化することが課題である。合同演習日を設ける等の方向で検討している。 【国際政治学科】 「国際政治への案内」については学生モニターから得られた受講生からのフィードバックを活かして期末試験の出題方法をさらに改善する。「国際政治ワークショップ」と「戦後国際関係史」についても、相互参観の効果が感じられたので、次年度以降も相互参観を継続する。
文学部	哲学科:18科目(うち1科目は担当教員の長期欠勤により非開講) 日本文学科:33科目 英文学科:10科目 史学科:3科目 地理学科:15科目 心理学科:23科目 共通科目:2科目	哲学科:0科目 日本文学科:4科目 英文学科:0科目 史学科:1科目 地理学科:2科目 心理学科:2科目 共通科目:2科目	【哲学科】 年度当初は授業相互参観を適宜実施する見通しであったが、年度途中で専任教員の長期欠勤が生じ、授業の予定や担当の変更が複数科目にわたって発生した。その対応を含め、学科の各教員の授業負担等が増加したため、授業相互参観を実施するには至らなかった。ただし、その対応として専任各教員によるオムニバス授業を行う中で、授業方法や成績評価などに関する相互の協議を行った。 【日本文学科】 前日までにメールで授業担当教員に事前許可を得るという申し込み方法をとった。講義形式の授業の場合は聴講という形で実施し、演習形式の授業の場合は討論に参加する形で実施した。演習形式の授業内では、討論の中で参観者の専門的知見が提供されることにより、受講学生のみならず、担当教員にとっても刺激となり、討論の内容も深まった。また、講義形式の授業内でも、担当教員から参観者にコメントを求める等、双方向的なやり取りを行うことで、授業の進行にメリハリがつけられ、受講学生の興味・関心を喚起する効果がもたらされた。 【英文学科】 英文学科では10科目の授業を公開したが、授業相互参観者はおらず実施科目数は0件であった。ただし、教員同士の意見交換は日頃から行われていることに加え、分野ごとのFDミーティングが実施されている。また、学科会議においても、研究倫理やFDについてなどについて意見交換を行なっている。 【史学科】 対面授業に参加した。授業の進め方や内容など参考になる部分もあったが、専門分野が異なるため、得られた知見の活用という点では工夫が必要である。 【地理学科】 今年度、地理学科では2科目であった。効果としては、授業内では受講学生ともディスカッションが行われたことで受講学生が刺激を受けることとなった。また、担当教員にとって参観者が受講学生に対して自分とは異なるコメントを行っていたため新たな気づきが得られた。 【心理学科】 心理学科では、今年度は2科目で授業相互参観が行われた。主に外部講師を招いた授業週で実施されており、専任教員が混じることにより外部講師と受講生との質疑応答や交流が活発となるといった効果が見られた。	【哲学科】 教員の長期欠勤が次年度も続く見通しなので、それに対処する中で、授業相互参観の実施方法を含めて、授業や成績評価の方法について学科全体で検討する。 【日本文学科】 昨年度と比べて、公開科目数は7増えたが、実際に参観が行われた科目数はほとんど増えなかった。参観しやすい科目、しにくい科目等の傾向が見られることから、今後は教員の時間割の都合も考慮したうえで、参観しやすい科目に様々な教員が参観できるよう、積極的に呼びかけを行って、心理的な障壁を取り除くようにしたい。 【英文学科】 引き続きFDミーティングを開催し、分野ごとに教育に関する意見交換・教育内容の検討を行う。学科会議においても、分野を超えて共有すべき内容を議論する時間を設ける。 【史学科】 授業や学生に関する情報を学科会議で共有し、適切に対応していくことを確認した。 【地理学科】 公開科目数に比して、実際に実施された科目数は多くない。ただし、演習形式の授業に参観する場合があったことにより、今後は演習科目も公開も検討する必要がある。 【心理学科】 各教員とも授業以外の時間は会議などが多く授業を参観する時間的余裕がなく、外部講師を招聘した週での参観に留まっている。授業相互参観を積極的に活用していくためには、より全体的な仕組みづくりを検討していく必要がある。 【共通科目】 「文学部生のキャリア形成」(春学期)、「現代のコモンセンス」(秋学期)の成績評価方法が春学期と秋学期で異なっていることは、共通科目全体としての統一性を欠くくらいがあり、次年度からはPF評価で揃えることにしたい。春・秋学期の独自性を考慮しつつも、基本的な点は統一するなどして適正に成績評価を行うようにしていく必要がある。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
経済学部	66科目(専任教員全科目)	7科目	(1)実施方法 ①公開方法 経済学部専任教員は各担当科目のうち原則として1科目は授業相互参観科目とする。 ②参観方法 経済学部所属教員は、所定の期間内にあらかじめ参観申込をしたうえで授業参観することとする。 ③公開期間 2024年6月10日(月)～6月14日(金) (2)授業実施者へのフィードバック等 参観申込み者には、執行部まで①授業担当者に対する感想、②授業相互参観制度に関する意見・感想の提出を依頼した。①授業担当者に対する感想については、授業担当者本人にフィードバックを行った。	数年来の課題であった実施科目数の増加については、新任教員による参観を義務付けたことにより、一定数の増加が見られ、FDIに資するものであった。引き続き、周知の工夫や実施期間の延長、兼任講師を含めた授業参観等についても検討を重ね、経済学部の教育力の向上を図っていきたい。
社会学部	全開講科目	40科目	①オムニバス型の授業での実施(1科目) 教員間で、授業の方法や内容に関する打合せを行っている。参加した教員にとって、今後の授業運営の参考となっている。 ②本学部ゲスト講師制度を利用した外部講師を招いての授業をとおした実施(38科目) 外部講師を招聘し、その授業を参観するだけでなく、外部講師との意見交換を行った。授業方法や内容に関して、刺激を受けることができた。 ③専任教員担当の授業に別の専任教員をゲスト講師として招く形での実施(1科目)	授業相互参観を含めた教員間の交流を通して、授業の方法・内容のさらなる改善を図ることを促す。今年度は、ゲスト講師制度の利用科目は昨年度よりも増加した。オンライン上でもゲスト講師を招聘出来る事が浸透してきたため、今後も授業内容の充実化や活発な議論を増やす機会にしたい。
経営学部	専任・兼任・兼任教員の全科目(オープンキャンパス模擬授業を含む)	10科目	(1)実施方法 公開対象は専任・兼任・兼任教員による授業(オープンキャンパス模擬授業を含む)とし、参観期間は2024年6月3日から12月20日とした。参観者が参観を希望する授業日の1週間前までに email等で授業担当者の許可を得る事前申し込み制とした。参観者は所定のフォーマットを用いて、授業内容の感想や参考になった点などのフィードバックを参観後1週間以内に授業担当者に行った。 (2)効果等 参観者からは、自らの授業運営に適用できる有用なヒントが得られた、新しい発見があった、大変参考になったといった前向きな感想が寄せられた。	今年度は春学期に周知を行ったこと、また新任教員への参観依頼を徹底したことで実施科目数を昨年の4件から10件に増やすことができた。しかし依然として参観数が少ないため、新任教員をはじめ教育経験が豊富な教員、また過去にベストティーチャー賞を受賞した教員などへの協力依頼を徹底し、実施件数の増加に努めたい。
国際文化学部	専任教員が担当する全科目	39科目(春学期19科目、秋学期 20科目)。ただし、同一科目名で曜日・時限の異なるものは別の科目とした。	春・秋学期ともに、教員から参観をすすめる授業を募り、その科目名・曜日時限・教室・公開時期をリストにして教授会で共有し、参観を呼びかけた。例年、担当授業の時間割や他の業務との兼ね合いから参観が難しいことが多いが、オンデマンド授業も実施科目に含めたことで参観が可能だったケースがあり、参観した教員からは授業相互参観の有意性を示すコメントが寄せられた。	実施科目数は例年と同程度だが、参観数が少ない状況が続いている。今回不参加だった教員も含めたアンケート調査を行った結果「授業時間と重なっているため参観できない」「他の業務で多忙で困難」等が理由として挙げられていた。今後は、時間を選ばずに参観可能なオンデマンド授業の提供・参観の呼びかけを強化するとともに、業務の空いた時間に参観をしやすくするような方策を検討する必要がある。
人間環境学部	専任教員が担当する全科目	12科目(フィールドスタディのコースも1科目とカウントした。)	1.「人間環境学への招待」 この科目は春学期に開講されている1年次必修の専門科目である。毎回2名程度の教員が各々の専門分野を紹介する講義を行う。専任教員のほぼ全員が1回は登壇するため、コーディネーターの教員(4名)と登壇する教員が、打ち合わせの際も含め、お互いの研究内容や授業の手法を知ることができる貴重な機会となっている。 2. フィールドスタディ、キャリアチャレンジ 2024年度は2科目で約20のコースを実施した。コロナ以降中止していた海外フィールドスタディも再開した。2名の教員が協力して企画したものについては、事前・事後授業、運営も共同で行っている。専門が異なる教員の組み合わせで開催するコースでは、お互いの専門性を活かしながら、分野横断的な視野を持つことが可能となり、教員間で啓発・刺激し合う機会となっている。 3. 人間環境セミナー 本授業は、原則として毎回、学外の実務家や研究者等、テーマに沿った分野の専門家を講師として招聘して行う講義科目である。各講師の専門としている研究や活動を学生に紹介することが主たる目的の授業であるが、コーディネーターの教員も授業には参加する。複数の教員でチームを作って企画や講師選定にあたる場合には、教員同士のディスカッションの場にもなっている。2024年度は計3科目(春学期1科目、秋学期2科目)を実施した。 4. ゼミへのゲスト参加 1名の教員が他の教員のゼミを参観し、コメント・講評を行った。専門が異なる教員がどのような手法でゼミでの指導を行っているのかを知るよい機会となっている。	左記4のゼミ見学は、比較的容易に実施でき、教員間の意見交換もしやすい形態である。他方で、ゼミは受講生が選抜された学生で構成されており、それだけを見ても、その教員の授業への取組み方の一面しか見ることができない。今後は、講義についても相互参観を進めていくことで、質の高い授業を維持していく動機になるのではないかと考えられる。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
現代福祉学部	本学部専任教員の担当科目(ただし、演習・実習科目、情報・調査系科目、言語コミュニケーション科目、その他、担当教員が公開を希望しない科目を除く)	5科目	<実施方法> 今年度は、対面式授業に参観されることを想定し、実施した。参観対象を増やすため、公開期間は授業実施期間とした。 <得られた効果> ・授業参観では、他教員の授業実施の方法、スライドの作り方やリアクションペーパーの活用の仕方、対話形式を意識した話し方や説明方法などを実際に見聞することにより、教育方法の改善に向けた認識を得たとの意見が寄せられた。 ・教室の巡回の仕方や学生が回答しやすい手法、回答しなくてもよいことなどを選択肢として提供していることなど、発表への配慮について学ぶことができたとの意見が寄せられた。 ・授業内で質問しなくても、授業後に質問をできるアナウンスをきちんと行われていることは学びになったとの意見が寄せられた。 ・学生にアクションさせる授業での工夫を学べたという意見もあった。 ・学生の関心を惹きつけるため、大学周辺地域の取り組みの事例を取り入れる、障がいをもつ青年のケーススタディをとりあげ、テーマ性に工夫がみられた。授業の後半に5分程度の動画を視聴させることにより、前半の授業内容をふまえた理解度向上につなげている。	・参観人数が少ないことが課題である。教授会やFD研修等で授業相互参観の結果を共有するとともに、教員間での課題などを共有できる機会を創出していく。
情報科学部	全科目	5科目	通常学部で実施する授業相互参観は、学期内に開講される講義を中心に行われていることが多く、今までスプリングセッションやオータムセッション、あるいは夏季休業期間や春季休業期間に開講される集中講義に関しては、授業相互参観の対象となることが少なかった。情報科学部では、リクエスト集中講義と呼ばれる学生のリクエストによってオンデマンドで講義科目を決定する取り組みを行っており、毎年、リクエストのあった科目に関して、学外・学内の教員を選定して講義を実施している。今年度は、リクエスト集中講義の教育上の効果を確認するため、リクエスト集中講義で開講された科目を中心に相互参観を実施した。また、集中講義に加え、卒業研究やインターンシップなど、通常授業相互参観を実施する機会の少ない講義の相互参観を実施した。	情報科学部では来年度、再来年度に実施するカリキュラム改変に向け、新たなカリキュラムの設計を行う予定である。カリキュラム改変では情報科学部開講科目の全学展開、特に文系に向けた情報教育について深く検討する予定であり、来年度はその計画に先立ち情報科学部科目の市ヶ谷キャンパスでの開講を行う予定である。次年度の相互参加では、市ヶ谷開講科目を文系の学生がどのように受講するかを分析し、今後文系・理系問わず必要となる情報技術を本学でどのように教育していくかを検討することが課題となる。
キャリアデザイン学部	専任教員が担当する学部専門科目全科目	34科目 (複数開講科目をカウントした延べ数85科目)	年間3回のFDミーティングを4月、9月、2月に実施している。基礎ゼミ、基幹科目のうち「入門」のつく科目、「キャリア研究調査法」(質的調査)(量的調査)、体験型選択必修科目については、FDミーティングまでに担当者間で授業内の取組や課題を共有し、改善等の話し合いを行っている。とくに複数開講科目については担当者間でシラバスの内容を確認し、授業の進め方や学生の態度、修得状況等について共有することで、よりよい授業実践につなげることができている。FDミーティングでは学部に対してこれらの報告を行い、学部教職員全員で共有することで、各自の授業改善に役立てている。また、基礎ゼミや入門科目について状況を共有することは、その上に積み重なる学部専門科目の担当者にとって、学習状況の確認にもなり、有益である。 相互授業参観については、専任教員の担当科目について、2科目を教授会で選定し、提示された公開日に教員が参観し、参観した教員によるフィードバックコメントを学部全体で情報共有する形で実施した。 学生の理解を促すための工夫として、比較的ゆっくりと解説すること、配付プリントに余白を設けてノートを取る方法を取ること、スライドと黒板を併用して口頭でのアレンジを多めに取り、学生の集中力を維持すること、授業内でミニ課題を課して学生に発表させることなどが授業参観教員によるフィードバックコメントにより学部全体で共有された。 また、理論的・概念的な理解に向けて、具体的な事例で補足する、あるいは、具体的な史実を確認したうえでそれらを鍵概念にメタ化して社会構造の変化を浮き彫りにしていく、といった手法が授業参観教員によるフィードバックコメントにより学部全体で共有された。 さらに1つの演習(ゼミ)で学生が主体となって実施した映画上映会とワークショップのプログラムに学部の3名の専任教員と他研究科の専任教員、教職担当の兼任教員3名の計7名の教員が参加し、教職担当の事務職員の参加もあった。上映後のワークショップではプログラムを主催した学生の様子へのフィードバックも見られた。	次年度も引き続きFDミーティングと直接の相互授業参観とを併用する。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
デザイン工学部	建築学科:17科目 都市環境デザイン工 学科:15科目 システムデザイン学 科:5科目	建築学科:17科目 都市環境デザイン工 学科:15科目 システムデザイン学 科:5科目	学期末に開催される演習科目最終講評会を他学科専任教員も参加可能な学科横断型講評会とする取り組みを本格的に始動させ、年度最後の教授会でその際の気づきを共有するなど意見交換を行った。 ・建築学科 建築学科においては、1年次から4年次に至る全てのスタジオ科目をはじめ、図形の技術、フィールドワーク、ビルディングワークショップ、卒業研究、卒業制作において、全クラス合同の講評会を行い、兼任を含む教員が相互に他の科目やクラスの内容について理解し、議論できるようにしている。さらに、公開講評会を適宜開催して学内外に対して学習成果を公開し、外部意見・外部評価を受ける機会を設けている。またデザインスタジオ、フィールドワークおよび卒業制作の優秀作品と卒業研究の梗概をそれぞれ学科発行誌「スタジオワークス」、「建築研究」に掲載することで達成状況を共有している。 ・都市環境デザイン工学科 1年次から3年次までの実習系授業について、学科の専任教員、兼任教員、教育技術嘱託、さらには他学科の専任教員が参加可能な形の全体講評会を開催し、学生への講評を介して授業内容についても議論できる場となっている。また、卒業論文は全専任教員により審査を実施しており、学科内で相互に研究内容を共有するとともに、審査を通じて意見交換が行われている。 ・システムデザイン学科 PBL を基本とした必修授業を中心に、全専任教員が参加して相互参観を実施しながら学生の指導にもあたった。学生は課題を調査し、その解決方法を企画立案し、企画・中間発表・試作・成果発表の各段階で全教員からのフィードバックを受け、学生と全教員が参加して講評を行う機会を設けた。今年度はすべて対面で実施し、学生の評価物に対して講評することで意見交換を行い、相互チェックした。授業中は、学生のプレゼンテーションとパネル展示を行い、実際の作品の動作を確認しながら、全教員間で情報共有して、コミュニケーションを図ることができた。このような相互参観の機会を含めた共同指導体制をとることにより、学生の授業や課題の進捗状況を全教員が把握し、学生からの作品制作にかかわる質問などを共有し、適切にアドバイスや指導を行うことができた。	学科横断型講評会へより多くの教員が参加することを促し、より活発な学科間交流を実現する。
理工学部	機械3、電気2、応情 9、経シ4、創生5	機械3、電気2、応情 9、経シ4、創生5	学科ごとに、カリキュラム上の特に重要な科目について、授業内での取り組みや直面している課題、改善点を整理し、理工独自のフォーマットにまとめた。これらの内容は学科会議で共有され、教員間で意見交換を行いながら、より良い授業運営に向けた議論を深めている。	・授業相互参観の実施率の向上 ・兼任講師を含めた全授業での授業相互参観の継続 ・兼任講師を含めた授業相互参観を引き続き実施し、専任教員との連携を強化する。 ・学科ごとの実施科目数のばらつきの解消と報告書の情報共有の検討を行う。 ・有意義な情報共有を行うための報告書のフォーマットの再検討を行う。
生命科学部	春学期 97(不可1) 秋学期 85	春学期 14 (参観回数14) 秋学期 9 (参観回数9)	生命科学部では、今年度、春学期(6月3日～6月29日)と秋学期(11月11日～12月7日)の2回、授業公開を実施した。今年度も例年と同程度の科目数の授業が公開された(2022年度:183科目、2023年度:179科目2024年度:182科目)。今年度の参観回数は昨年度よりやや減少した。授業参観者アンケートの自由コメント欄では、それぞれの授業で行っている工夫が参考になったという意見が多く見られた。	参観人数が減少しているため、次年度は授業公開が若手教員の育成機会にもなっていることなどを伝えて教務助手などに参観をさらに促す必要がある。また、法政アドレスを利用する習慣が無い兼任講師への連絡が機能していないため、サブアドレスの登録制度を整えるなどの対策を検討する。
グローバル 教養学部	17科目	1科目	秋学期間中、各教員が相互参観対象授業として、1～2科目を公開した。参観教員からは、学生の授業への主体的な関与を促す講義方式について有益な知見を得たとの報告があり、教授会ではそれに基づき講義の在り方について意見交換を行った。	実施科目数の増加を目指す。
スポーツ 健康学部	全科目(348科目)	8科目	学外からの兼任講師、ゲスト講師に関する報告がほとんどであった。いずれも専任教員による内容を超えた新たな視点による授業を評価し、学生への教育効果があったと報告している。	全科目数からみて参観授業数は少ないのが課題である。授業の相互参観によって教員同士が高め合うような積極性のある参観が望まれる。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
市ヶ谷リベラル アーツセンター	全科目	17 科目	【全体概要】 2024年度に実施された授業相互参観(計9科目)ならびに教員相互情報交換会 の内訳は、下記の通り。 ①授業相互参観(従来型):0科目 ②授業参観による研修(新任教員対象):8科目 ③セルフ授業参観(録画記録によるセルフレビュー型):1科目 ④教員相互情報交換会:8件 授業参観の実施科目数(9科目)と情報交換会の件数7件)のバランスはよい。授業参観の実施方法については、授業参観による研修(新任教員対象)が昨年の1件から大幅に増加し8件となったことは評価できるが、授業相互参観(従来型)が0件になった。 次年度は実施方法についてもバランスよく実施いただくよう働きかけたい。 【実施方法や効果等について】 ①授業参観による研修(新任教員対象) 「経済学LA」、「イオンの科学B」、「ドイツ語1Ⅱ」、「ドイツ語4」、「中国語2」、「スポーツ総合演習」で実施された。詳細は分科会報告書を確認いただきたいが、各授業について、参観者の所感(一部)を以下に簡潔に記す。 「経済学LA」・・・板書の文字は適切だった。PowerPointがわかりやすかった。授業に全く問題はない。 「イオンの科学B」・・・実験操作を書画カメラを使用し実演しながら丁寧に説明された。学生が作業のコツをつかめるように工夫したり、多工程の実験を完了できるような授業計画を立てられていた。 「ドイツ語1Ⅱ」・・・学生の知的好奇心をうまく引き出す内容だった。学生が発音を間違えてもモチベーションを失わないようなフォローが随所になされていた。 「ドイツ語4」・・・電子機器を活用しながらの授業は、見やすく効率的だと感じた。言語を能動的に学ぶための授業運営をなされていた。高度な内容と効果的なグループワークがなされていた。 「中国語2」・・・集団での発音練習は、緊張せずに大きな声をあげられるという点で、とてもよい方法だと感じた。発音を矯正するという意味では、個別に発音させるのもよいと思う。スライドを使用し大変時間効率のよい授業だった。 「スポーツ総合演習」・・・「前回の復習」および「本日の授業の目標」から始まるため、目的意識を持ちながら授業に参加でき、また授業冒頭にメモを取りながら受講する促しがあった点も評価できる。 以上からも、授業参観の報告書をみると、学生の知的好奇心を引き出すようさまざまな工夫がなされていることが確認できた。 ②セルフ授業参観(録画記録によるセルフレビュー型) 「情報処理演習」1科目で実施された。「情報処理演習Ⅱ」では、Excel のマクロの授業を行い、映像をみると早口になっていた。マクロプログラミングは初めてという学生が多いため、内容を整理してゆっくりと説明したほうがよい、との所感が確認できた。セルフ授業参観においても、引き続き実施を促していきたい。 教員相互情報交換会 人文科学、自然科学、英語、諸語、(ドイツ語(2回)、ロシア語、中国語)、保健体育の各分科会(及び各言語部会)において、計7回すべて対面で実施された。前年度授業の振り返り、カリキュラムの説明、授業運営上の留意事項の周知、学生の理解度に合わせた授業の仕方やアクティブ・ラーニングの取り入れ方、授業の工夫や学生の意見からの気づき等の共有、教員同士での各種相談や交流等が行われ、このような情報共有の場の重要性について改めて認識できた。	授業参観と教員相互情報交換会の総数(合計16)は昨年度から微減になった。また、授業参観による研修(新任教員対象)が昨年の1件から大幅に増加し8件となったことは評価できるが、授業相互参観(従来型)が0件になったことについては次年度の課題としたい。授業参観と教員相互情報交換会はFDに寄与する貴重な機会であるため、今後も積極的な実施を呼びかけたい。
小金井リベラル アーツセンター	原則として全科目 (ただし担当教員が公開を希望しない科目を除く)	8科目	今年度も従来同様、参観期間は限定せず、春学期・秋学期授業実施期間のいつでも、関係教員の関心と都合に応じて参観が実施できるようにした。参観の可否や日時などは分科会単位で事前調整し、参観は対面でもオンラインでも構わないこととした。参観した教員は、指定の報告書を記入し各分科会単位でとりまとめ、運営委員会で情報共有を行った。 参観した教員は参観した授業から多くの学びを得ており、自分の授業の改善にも役立っている。	授業相互参観を通じて得た知見を、参観した教員・参観を受けた教員以外の教員とも共有し、授業実施にいつそう生かしていけるようにしたい。分科会の垣根をまたいだ参観をより行いやすいものにしていく。
SSI(スポーツ・サイエンス・インスティテュート)	64科目	1科目	1. 対象授業 スポーツ学入門(春学期開講科目) ・2024年度よりSSIの必修科目に位置づけるとともに、オンデマンド形式を採用することによって市ヶ谷および多摩に在籍する全SSI生を対象に開講した。 2. 参観方法 ・第4回(キャリアセンター担当講義)、第6回(学生相談室担当講義)の授業動画を視聴した。 3. 授業効果等 ①第4回(キャリアセンター担当講義) ・セカンドキャリアについて検討する際の指針となるデータ(全国の大学生、法大生、SSI生の就活状況等)を提示しながら、新入生をはじめとするSSI生が自身のキャリアについて検討するきっかけ作りの好機となる授業が展開されていた。 ②第6回(学生相談室担当講義) ・SSI生にとって疎遠となりがちな学生相談室の機能と役割について、SSI生が理解しやすい内容が展開されていた。 4. 総括 ・参観した授業は、総じてSSIの導入科目に適した授業内容を提供していたと思われる。 ・今後は授業の教育効果について確認していく必要がある。	・新カリキュラムの実施初年度であるため、今後は授業アンケートや学生モニター制度などを活用することによって、SSI生の授業に対する満足度などについて具体的に検討する必要がある。